

公開対談シリーズ第12回

NINAGAWA 千の目

2008年新年早々に颯爽と現れた藤原竜也さんには、実は「熱い決意」があった。俳優として演出家・蜷川幸雄に語る芝居の夢。『身毒丸』の2月アメリカ公演、3月本公演を前にした二人の会話は、大きな期待の光を新春の会場に差し込んだ。



(財)埼玉県芸術文化振興財団 芸術監督・演出家

俳優

蜷川幸雄×藤原竜也

15歳の真っ白の『身毒丸』から10年、そして

蜷川(以下N) どう、ここは久しぶりでしょう。

藤原(以下F) 久しぶりですね。明けておめでとうございます。

N おめでとう。しょっちゅう一緒にいるように思われるようですが、めったに一緒にいることもなくて、実は二人で話し合うことも割と少ないんです。

ちょっと痩せていますよね。何でそんなに痩せたの？

F これは先週終わりましたが、『カメレオン』という映画を撮ってしまいで…。

N さっき「どうしてそんなに痩せたんだ」と聞いたら、『身毒丸』が始まるから」とまんまと嘘をつきやがって(笑)。

F でも、さっき蜷川さんは「おまえ、もうたらいに入れないだろう」と言っていましたからね。

N 15歳で藤原君はロンドンでデビューしました。覚えている？
ホテルの前に着いたら、竜也がバスから降りてきて「わあ、ロン

ドンだ、ロンドンだ」と言っていた(笑)。ああ、伸びやかで単純でかわいいなと思っていました。そして、バービカンというロイヤル・シェイクスピア・カンパニーが本拠地にしていたいい劇場で、彼は初舞台を踏みました。本当に希有な例です。懐かしいね。夢のようだね。

F 僕は今25歳で今年26歳になりますが、最初のこの『身毒丸』という作品と、蜷川さんという演出家と、白石加代子さんという共演者、その三つがなければ今は間違いなく続けないと思うんです。やっぱり蜷川さんの演出というか思いが自分の中でもすべてでしたから、蜷川さんにその後教えてもらったことも山ほどありますが、『身毒丸』がなかったら僕は俳優として間違いなく間違った方向に進んでいると思う。今ここに立ってられることもないのではないかと感じます。ものすごく大きな出会いだったなと思いますね。今回はアメリカ公演もというのもありますし、改めて実は年明けから台本を読み出しましたが、『身毒丸』はすごく楽しみです。

N 僕は昨日『身毒丸』のビデオを見たんだ。「え、こんなことを

「オギャーと生まれて真っ先に見たのは蜷川さんですから、責任をとってくださいよ」(藤原竜也)

やっていたのか、結構複雑な演出をしているな」と思って。僕にとってもあの作品は大きな意味を持っていたし、竜也と会ったのもあの作品のオーディションを通してだし、あれから約10年経ってこうやって一緒にステージにいと、いろいろなことをくり抜けたなという感じがするね。

F 僕はいまだに蜷川さんと一緒にいるといっぱい汗をかきます。それぐらい緊張しますよ。蜷川さんは、イギリスとかニューヨークという場所は、大きな違いがありますか。

N イギリスはやっぱり緊張するね。義理のお客さんの反応がないから、即評価が出る。劇評でもそうだね。

今度の『身毒丸』ワシントン公演というのは、ケネディセンターが呼んでくれる日本の芸術のフェスティバルだけど、プログラミングがすごくいいんです。古典芸能を過大評価することなく、冷静にジャッジをしながら現代芸術を紹介してくれるなと思ってね。そこでメインの作品として、『身毒丸』が紹介されるのはすごく嬉しいことです。だから竜也にもいい演技をしてもらって、この作品が優れているということを立証してほしいなと思っているんだよ。

F 頑張ります。実は僕は去年ロンドンに4カ月行かせてもらいました。そこで結構多くのイギリスの演劇の関係者の方々に会わせてもらったんです。「竜也は日本でどういうことをやってきたんだ」と聞くので、「僕は蜷川さんとやることが多かった。『ハムレット』や『ロミオとジュリエット』をやった」と言うとみんなが驚いていたんですよ。ある意味イギリスの中での知名度としたり、たけしさんとかよりも蜷川さんの知名度がすごかったですね(笑)。

俳優・藤原竜也語る、「聞いてください、蜷川さん」

F ちょっと話が変わりますが、僕は蜷川さんと映画でも組んでみたいと思います。皆さんどうでしょうかね。(拍手) やってこないかなとずっと思っているのですが。

N 俺はまだ映画監督としては三流だ。もうあと一本ぐらいやると、もう少し良くなるからね。

F でも、新鮮でしたよ。この間蜷川さんの撮った映画(『蛇にピアス』)に出させていただき、深夜のロケでしたが、蜷川さんが僕のところに来てくれて、「新人監督の蜷川です」と挨拶してくれた。こっちはどうしたらいいかわからないような感じがしましたが、やっぱり緊張していましたか。

N うん、緊張していた。実はゲストで出てもらったんです。もう最高に格好良くて、頭は良くて、こういう俳優なのだとわかりました。それからそういう現場で会う竜也は、演劇の現場で会う竜也と全然違います。まずいい子ぶっていない。演技が伸び伸びしている(笑)。つばは吐く、ズボンの中に手は入れる、歩き方はひどい、もう田舎のヤンキーのような役です。だけどそのうまさに余りにも

びっくりして、「俺はおまえを違う人として見ていたかな、今ここにいるのは全然違う人だ」と言って、僕は人間に対して結構うぶだということがわかりました(笑)。まんまとだまされていたような気分、そのぐらい良かったです。そう見ると、もう少し俺がいい演出家でないとかだめだとは思っているけれども、違う竜也をつかまえることができるかもしれないね。

F 近い将来やってください。あと蜷川さんとは芝居の新作でちょっと勝負したいなと思っているのですが、それも考えてくれますか。

N どういうのをやりたいの？

F 僕はもちろんシェイクスピアとかギリシア悲劇はすごく良かったのですが、蜷川さんはいつも一番後ろから本番を見ますよね。そのときに蜷川さんが見ていて奮い立たされるような、確かにこの時代に僕らは生きていたと思えるような芝居に、僕は参加してみたいという思いがあります。

N ということは、唐十郎とか清水邦夫とかそういう芝居かな。僕らが70年代ぐらいにやっていたような、社会的な動きの真ただ中を走り抜けたみたいない時代の作品のようなものということだね。

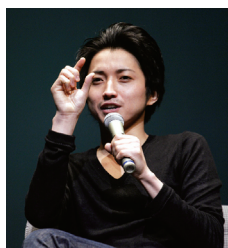
F はい、すごくやりたいです。

N それはあり得るかもね。『唐版俺の白糸』をやったでしょう。あれはどう、気に入っていた？

F いまだに明日にでもできるぐらい、すごく好きです。今日は映画と新作と二つ話しました(笑)。本当に今までは実は蜷川さんが竜也はこれをやったから、来年はこれができるというような伝え方をさせていただいていましたが、最近自分からアクションを仕掛けていかなければ自分自身もだめになると思って。現に若い才能がある俳優はどんどん出ていますから、自分もその中に入っていくためにはしっかりと意思表示をして、こういう話し合いの中から生まれてくる仕事というのも絶対にしていこうべきだなと思うようになったんですよ。

N 確かに日本語の戯曲は違うし、シェイクスピアやギリシア悲劇ともまた文体が違うから、竜也の中にまだ眠っている、まだ使っていない分量が残っているだろうと思う。そういう言葉をしゃべらせたいなと思うな。

何か大勢の人の前で約束させられたと(笑)。今日は、新年早々からありがとう。



profile: 藤原竜也 (ふじわら たつや)

1997年「身毒丸」(蜷川幸雄演出)で初舞台を踏む。以後多くの蜷川演出舞台に出演している。また野田秀樹演出「オイル」「ロープ」、グレゴリー・ドローラン演出「ヴェニス商人」などの舞台や、映像でも活躍しており、金子修介監督「デスノート」は大ヒットを記録した。第38回 紀伊國屋演劇賞 個人賞(2004年)、第3回 朝日舞台芸術賞 寺山修司賞(2004年)、第11回 読売演劇賞 優秀男優賞・杉村春子賞(2004年)など、数々の賞を受賞している。今年は舞台「かもめ」(6月)、映画「カメレオン」(初夏)などが控えている。